

111 学年度第一学期ユーラシア財団 (from Asia) 国際講座  
「アジア共同体：東アジア学の構築と変容」シリーズ講座 (13)  
テーマ：日本中世の国家と宗教

中国文化大学 111 学年度ユーラシア財団 (from Asia) 国際講座の第 13 回目は、東京大学名誉教授の末木文美士先生による「日本中世の国家と宗教」と題する講演であった。末木先生は講演冒頭と講演末尾に京都の寺院の写真を配したパワーポイントの表紙（金閣寺）と裏表紙（壬生寺）を見せて日本の足利義満建立の話と伝統的な仏教行事について言及した。古代には仏教のほうが天皇よりも優位であり、それは大仏を建立した聖武天皇や道鏡を支持した孝謙天皇（称徳天皇）に明らかであったが、桓武天皇の時代から神道が再興され、平安京内には仏教寺院を作らせなかった。中世は平安末期から室町頃までの 11 世紀から 15、6 世紀までであると説明し、日本の伝統的な国家構造の特徴は、基本的に中世前期（10～13 世紀）に定まり、それが江戸時代まで続いたことを述べた。

それは、世俗の国家権力（王権・顕）と聖なる宗教権力（神仏・冥）とが対峙しつつも協力するという構造である。王権は天皇一人に集中せず、摂政・関白や上皇によって制御され、12 世紀後半以後は武家政権ができて、天皇を中心とする朝廷と将軍を中心とする幕府とが対峙する構造となった。幕府が政治を執る一方で天皇は文化の中心となる役割を担った。中国なら『礼記』があつて多くの儀礼のしきたりを守ることができたが、日本では律令が 7、8 世紀に完成したものの時代の変化に付いていけず、有職故実に従う他に儀礼を維持することができなかった。また、将軍を形式的に任命するのも天皇の役割であった。こうした役割は 19 世紀前半まで基本的に不変だった。

また、神仏の中では、仏法の力が強力で、在来の神の力を圧倒していたが、次第に神の力が勃興するようになった。中世までは神仏習合のもとで、本地垂迹の思想が圧倒していたが、神道は 13～15 世紀頃に一般化して自立しつつあり、18～19 世紀頃に平田篤胤が体系化した。

このような王権と神仏が対抗するヨコ型の二元構造は、中国の儒教を中心として、仏教や道教が国家体制から排除されるタテ型の一元構造とも異なり、また、タイのように、仏教が世俗の王権の上に立つタテ型の二元構造とも異なる、日本に特有なものである。

この二元構造は、明治維新（1868）に大きな社会変革が起こって転換した。神仏分離令がその象徴である。近代的な権力構造は、天皇中心に一元化され、宗教も天皇に奉仕するものとして再編された。この構造は、第二次世界大戦における敗戦（1945）まで続いた。

それでは、このような中世の二元構造はどこに理論的根拠があるのか。ここで注目されるのが、天台宗の最澄（766/767～822）である。最澄は入唐して天台宗を伝えたが、晩年、『梵網経』による大乘戒（梵網戒）の戒壇（大乘戒壇）の設立を意図して朝廷に申請し、没後に承認された。梵網戒は中国でも用いられたが、出家者・在家者に共通する大乘の菩薩精神を付与するものと位置づけられ、出家者の規律としては『四分律』に基づく具足戒が用いられた。最澄は、具足戒は小乗的だとして否定し、出家者にも梵網戒だけの授戒を主張した。

最澄は、梵網戒が出家者・在家者に共通することを「真俗一貫」として高く評価した。仏教界の菩薩は世俗では君子に当たるとして、両者が協力する体制を理想と考えた。仏教界の最高者は国宝と呼ばれ、精神界の指導者として、世俗の指導者である国王（天皇）とともに理想の世界を作っていく責任を持つ。それに次ぐ仏教者は、国師・国用と呼ばれて、各地域の精神的な指導者となり、菩薩の利他の精神をもって人々を導くというのである。

このような最澄の理想は、必ずしもその通りには実現しなかったが、それがもとになって、中世の日本では、王権と仏法が対抗しつつ協力する二元構造ができあがった。この構造は王権と仏法が一体化することもなく、解体されることもなく、社会構造の両輪として19世紀中葉まで生きていったが、欧米の開国要求に対応する幕末に権力構造の重層化、二文化が危険視され、一元化することになった。一方、仏教界では日本の僧が具足戒を授戒されていないために中国留学の際に一人前の出家者として認めてもらえず、無授戒扱いされ、見習僧である沙弥僧として認識されてしまうようになった。そのため江戸時代には「偽戒牒」を発行するようになったという。

とはいえ、王権と仏法がバランスをもって助け合う構造は、今日のように世俗権力が暴力化して歯止めの効かない状況において、再考する必要があるように思われ、こうした発想はユネスコ憲章とも深く関係すると考えられるのである、と先生は講演を締め括った。

（ウェブサイト：<https://eurasia.pccu.edu.tw/index.php>）

（日本語原文：齋藤正志 日文系教授）